

神奈川

市場規模5兆円といわれるアクティブシニア(自分なりの価値観を持つ元気なシニア世代)の“消費パワー”を狙って、横浜市内でもさまざまなサービスが登場してきた。将来への不安から現役世代が出費を渋る中、企業は新たなターゲットとして「5年遅れ」でリタイアの時期を迎えた団塊の世代に注目。高度経済成長期に社会的ブームやヒット商品を生み出す原動力となったこの世代を相手に、再びマーケティングの試行錯誤を始めた。若者市場の陰に隠れがちだったシニア市場全般を掘り起こす起爆剤となるか。

横浜駅東口近くに今年7月開館した、世界最大級のジオラマを擁する「原鉄道模型博物館」(同市西区)。年間入場者目標の半分に当たる10万人をわずか55日間で達成し、記念セレモニーが行われた。その席で話題になったのが「孫を連れた団塊の世代」の多さ。同博物館を運営する三井不動産の担当者は「親子連れをターゲットにしていたが予想が外れた」と打ち明ける。リタイアした60歳代半ばの男性が孫のお守りにかこつけて、かつて楽しんだ鉄道模型を見に来るといったパターンが、入場者の急増をもたらしたのだ。

若者のたまり場だったゲーセン(ゲームセンター)も、変化が見えはじめた。同駅西口の大型ゲーセンには、平日の昼間はシニアの姿が目立つ。パートナーや友人と連れ立ってクレーンゲーム、コインゲームなどに興じるのは、団塊の世代やそれより上とおぼしき人々だ。「賞品を家へ持って帰ると孫が喜ぶのでやめられない」と60歳代後半の男性。ゲーセン側もいすを座りやすいものに替えたり、遊び方を教えたりして、シニアのリピーターを増やす工夫をしている。

もともとシニアの顧客が多い老舗の「ホテルニューグランド」(同市中区)は、1950年代から60年代にかけてはやった「歌声喫茶」を再現した「うたごえサロン」を10月11日に開催する。普段はチャペルに使っているタワー棟18階を「トップ・オブ・ザ・グランド」と称して有料開放。早大グリークラブなどの指揮者を歴任し、童謡普及をライフワークとする山本健二さんをソングリーダーに招く。料金は4,500円だが



「新横浜ラーメン博物館」が関連商業施設で始めたジャズライブの定期演奏(横浜市港北区)

アクティブシニアに熱い視線 団塊の世代のリタイア迎え 新サービス続々

早々と完売し、吉田一継総支配人は「定例イベントにしたい」と意気込む。

「新横浜ラーメン博物館」(同市港北区)は、老舗ジャズライブハウス「横浜エアジン」(同市中区)とタイアップして今年7月から毎月1回、関連商業施設「新横浜ラントラクト」でシニアが好むジャズ演奏を始めた。9月10日の公演は満席。団塊の世代に、勤め帰りのサラリーマンやOLが交じる。スタンダードナンバーに耳を傾けながら杯を重ね、夜がふけて行った。同博物館の岩岡洋志館長は「横浜といえばジャズ。アクティブシニアの人々が集える場として、ジャズライブの定期公演を企画した」と話す。

1947~49年に生まれた団塊の世代(約700万人)は5年前から順次60歳代に入ったが、年金支給開始年齢の延期もあってリタイアが遅れた。47年生まれが今年65歳となり、本格的に現役を引退する。高度経済成長期の大量消費を経験したこの世代は、従来のシニア世代とは全く異なる価値観や消費性向を持ち、新たな市場が生まれる可能性を秘める。総額で100兆円を超える60歳以上のシニア全般の消費支出を底上げし、消費不況打破の救世主となることも期待されている。